



耕地整理の先覚者

## 栗野善知

栗野善知は、胆沢郡南都田村（現在の奥州市胆沢区南都田）の村

長として、岩手県で初めての耕地整理事業（収穫を多くするために土地を耕しやすい形にしたり、排水や水をおくる設備をよくしたりすること）を行った人物です。三一四ヘクタールに及ぶ広大な耕地整理は全国でも珍しく、これにより、馬による耕作や二毛作ができるようになり、農家の作業が楽になったばかりでなく、県内有数の穀倉地帯（米などが多くとれるところ）としての基礎を築き上げた。

栗野善知は、一八六四年に（元治元年）に胆沢郡南都田村字宇南田（現・奥州市胆沢区南都田）の農業、栗野善蔵、ツナの長男として生まれた。兄弟は三人で、三人とも祖母イナに厳しいしつけを受けて育つ。善知は、ことにも栗野家の長男として、水沢の八幡恭助からそろばんを習い、月岡兵助から漢学の教育を受け、個性の強い負けず嫌いの少年としてたくましく成長した。

一八八九年（明治二十二年）村の合併で南都田村が発足し、村役

場ができること、読み書きの達人な善知の才能が認められて書記に採用されました。善知の言動はつねに先を見通し、何をするにも用意周到で、しかも、素早く対応した。その反面、強引ともみられるやり方は、一部の人々の反感を招くこともあった。

明治二十三年（一八九〇）八月、初代の助役（村長を助ける仕事を）に選任された。

一八九六年（明治二十九年）、耕地整理事業の先進地だった石川県や静岡県を視察し、大きな刺激を受け、次の四項目実現を心に秘め、村に帰る。

- 一、馬で耕すため水路を整理する
- 二、農道、水路をできるだけ直線化する
- 三、湿田を乾田化し、れんげ草を植えて肥力を高める
- 四、耕地整理により田を多くする

一八九七年（明治三十年）には、郡役所や県庁を訪れて、耕地整理に関する法律や制度、工事のやり方を研究し、静岡県の先進地を視察するなど準備を進める。

一八九九年（明治三十二年）には、南都田村村長の石川修吉が病気のため引退することになり、助役である善知が村議会の推薦を受けて、三十六歳で後任の村長になる。

村長になった善知は、南都田村全体の九〇〇ヘクタールを区画整理する案を議会に出すが、反対が多く否決される。そこで、実施地域を縮小し、同意の得られやすい出身地の南下幅の三一四ヘクタールに変更して、再提案する。しかし、この案でも猛烈な反対にあう。その理由は、先祖の土地が動かされる、先祖の墓が動かされる、金がかかる、自分の土地が狭くなるのではないか、荒地と交換されるのではないか、などであった。善知は村長としての権限と積極的な行動、綿密な計画に、懐柔策を合わせて、同意させることに成功する。

一九〇一年（明治三十四年）農商務大臣から認可され、翌年の十月から工事を始める。この間に三回もの凶作に見舞われるなど、難事業であった。四年の歳月をかけて工事が終了するが、区画整理と同時に排水路の整備、馬耕の導入、短冊苗代の奨励、さらに肥料設計の指導、害虫駆除のための誘蛾灯の配布など農業の近代化が次々と実現された。

工事が終わり、新しく区画された水田が農家に配分されると、工事費の支払いが始まる。費用は農家が負担し、新しく配分された水田の面積に応じて返済する仕組みであった。さしあたっての資金は、盛岡銀行と日本勧業銀行から借り入れる。借り入れの際には、善知

ら役員八人が借受人になり、そして十二年間で返すことになっていて、返せないときは、強制執行（土地を取り上げられる）を受けることとなっていた。

ところが、凶作、不作が続く、あるいは米の価格が下がるなど、農家のくらしは苦しく、利子の支払いもできない農家が増加した。支払いができなくなった農家は、地主や裕福な農家に頼んで支払いを行った。

やがて水田は貧しい農家の手からはなれ、事業の責任者である善知や特定の地主のものになる。水田を手にした地主も小作料（田を耕させる代わりに米やお金をもらう）が入るわけではないので、銀行への支払いは地主にとっても重荷であった。

善知は、地主になろうとして耕地整理を提案し、実施したのではなかったが、このような結果となり、善知自身も多額の借金を背負い、苦しい生活に陥った。

負けず嫌いな善知は、何とか借金を返そうとして、農業以外の事業にも手を出した。米を輸送する運輸会社、貸し長屋、生命保険業などと、次々に事業を拡大した。これらは、少しでも借金を返そうと始めた事業であったが、ますます借金をふやすことになった。

一九一四年（大正三年）、厳しい銀行の督促があったが、銀行へ

の支払いができずさらには借り入れもできなくなった善知は、事業を整理し、南下幅の自分の土地も処分して、夜逃げ同様に南都田から離れた。

一九三一年（昭和六年）、村長として敏腕びんわんをふるった南都田村に一度も姿を見せることなく、大阪にいた長女のもとで六十七歳の生涯を閉じた。善知の行った耕地整理の事業は、この後、他の地区でも行われ、胆沢地方の農業の近代化を推進した。



あいのぜんち  
栗野善知の石碑（胆沢）

\*参考文献

『胆沢町史 VI 近・現代編 1』  
『岩手の先人 第二集』

胆沢町  
日本教育会岩手支部



耕地整理された田